

会長講演

沖臨技のこれまでの歩みと今後の課題

手登根 稔
(社会医療法人仁愛会 浦添総合病院、沖臨技会長)

沖縄県臨床検査技師会は、1950年9月30日に結成され、今年で74年目を迎える。コロナ禍で開催を見送っていた「沖臨技70周年・法人化35周年記念式典」も、漸く昨年7月に無事終えることができた。10年前600名程だった会員数も、今では900名を超える大きな組織へと成長してきた。

1950年9月にレントゲン技術者と衛生検査技術者44名が集い沖縄群島医学技術社会を結成したのが、現在の当会の発端であったようだ。翌年には新たに琉球衛生検査技術者会が発足し、その後、昭和61年には社団法人へと法人化に至った。そして、平成20年に施行された新公益法人制度に基づき、「公益」か「一般」かの選択が義務付けられ、当会は平成24年に一般社団法人として認可されることになり現在に至っている。

沖臨技の歴史を振り返るべく、創立40周年記念誌を紐解いてみると、昭和37年に立法化された琉球衛生検査技師法には、検査技師の業務独占(制限)がうたわれていたとのことで、当時本土の技師会からも高く評価されたと記載されている。その後、本土の技師法に置き換わると業務独占が消滅し、今に至っているようだ。臨床検査技師の業務独占については、今でも永遠の課題であり、沖縄県の先人の方々がそれを実践していたことを誇りに思う。是非、この思いを若い世代へと継承していく必要があると痛感する。

2000年には念願の全国学会(第49回日本臨床衛生検査学会)を沖縄で開催することが出来、徳本弘大会長、宮城景正実行委員長のもと、参加者4132名と多くの方々が参加され、懇親会も初のビーチを利用した屋外での懇親会で、サンセットをバックに大盛況で、今でも伝説の懇親会として語り継がれている。

小生は3期6年間、現在の会長職を全うしてきたが、その前の副会長職が8期16年と長く、長期に渡って沖臨技の運営に関わってきた。副会長に就任した当初から、約10年近く学術を担当させていただ

いた。2003年までは沖縄県医学検査学会の一般演題数は30程度を推移していたが、副会長を拝命して翌年の2004年には50を超え、その後も毎年40演題前後で推移してきた。単に数が伸びただけでなく、内容もレベルが上がり充実してきたように思う。1991年から16年間続いた厚生労働省派遣臨床検査研修会においては、我が国における著名な先生方を招いてのレベルの高い研修会が開催され、その後もハイレベルの充実した研修会を開催してきたことが、確実に沖縄県のレベルの向上に繋がってきたと確信する。

公益事業として一番大きな事業は、「検査と健康展」で、市民への健康づくりの啓蒙と臨床検査技師の知名度アップを目的に、2008年から沖臨技主催で約5年間、「浦添市温水プールまじゅんらんど」と「環境の杜ふれあい」の二カ所で開催され、毎回200名余りの一般市民の健康チェック(頸動脈エコーや骨密度測定等)を実施し成果を上げた。その後、全国「検査と健康展」を毎年11月頃に日臨技からの助成金をいただいて開催してきたが、昨年はラジオ番組への出演やコマーシャル放送、地元新聞(二社)への広報活動を強化した。特にラジオ沖縄の「ティーサージパラダイス」という番組では「臨床検査技師って知ってますか?」というアンケート調査を行っていただいた結果、4割の方がYESとの回答であった。その中には名前だけ知っているという方々も含まれている可能性はあるが、コロナ禍においてはPCR検査等で知名度は上がっており、予想より高い結果であった。

今後の課題としては、一番大きなことは、やはり臨床検査技師の知名度を如何にして向上させていくかである。若者の技師連盟離れの問題もあるが、是非若手技師が中心となって、SNS等を利用した知名度アップ、ひいては社会的地位の向上に繋がられるような活動を積極的に実践してもらいたいと切に望む。

沖臨技が近い将来、県民のため、もしくは多職種からも更に必要とされる団体となることを祈念する。